

Der Wind

(風)



五年ぶりにドイツを訪ねる

湘南日独協会 相談役 大久保 明

5月12日入国、21日出国の短い滞在の5年ぶりのドイツでした。新型コロナの感染流行直前の2019年6月に2週間のドイツ旅行後の初めての海外、老いの一人旅で、家族には様々な制約を申し渡されて出発しました。目的は友人、知人との再会とその間に亡くなられた友人の墓参でした。

外国為替市場では円安の進行で、ドイツの物価上昇と合わせて何もかも五年前より高くなったとの印象が強く残りました。日本のビジネスホテル系統のホテルに宿泊しましたが、5年前とは顧客層に大きな変化があり、日本人の比率は極端に少なくなり、ドイツ人を含む欧米系と中国人を中心とするアジア系が多く見られました。街でも日本人旅行者に会うことも少なく、アジア系より中東・アフリカ系の人達の姿が予想以上に増加していました。これは移民政策の結果、労働力でも彼らに依存することがより鮮明になったと感じると同時に、文化・風俗の異なる人々の増加により一般市民の少なからぬ精神的負担になっていることを強く感じました。

今回、現在日本で議論されている「夫婦別姓」に関して印象深い事例に出会いました。丁度50年前に初めてドイツへ赴任した当時、一緒に机を並べたドイツ人女性に会いました。彼女とは何度もドイツあるいは日本で会い、彼女のこれまでの結婚も離婚も知っています。彼女は離婚後再婚しても前夫の姓を名乗っています。ドイツのメルケル元首相も同様に最初の夫の姓を名乗っていることは有名です。そればかりではなく、前夫の血縁者の集まりに参加しずっと「家族的付き合い」を続けているようです。一度親しくなった夫の縁者と、夫との離婚後もわだかまりなく交際しています。

妻がイタリア系の米国人の友人は、今年はサルジニア島に血縁のある多くの家族が集まり1週間を過ごすそうです。欧米の個人主義と思われる彼らが今もって大家族的な繋がりを大事にし、楽しんでいることを知り、従兄弟程度の近親者とも疎遠になりつつある「核家族的」な昨今の日本との違いを感じさせられました。

友人の墓参もしました。共同墓地に埋葬（単独の土葬）され、残された夫人（子の無い）のための墓地は別の場所になる予定ということです。もちろん家族用の墓地を有する方もおります。別の友人の夫人は私がドイツへ行く直前に亡くなり、残念ながら会うことが出来ませんでした。その夫人は本人の希望でハンブルク近郊の自分の生まれ故郷の家族墓地に埋葬され、配偶者である友人は現在住んでいるフランクフルトの郊外の共同墓地への埋葬を考えています。このように、ドイツ人の生前も死後も常に個人を重視した考え方に改めて強い印象を受けました。一方日本では核家族化が進み、親戚付き合いが薄くなり、戦前の日本での田舎のような、大家族主義的な繋がりがヨーロッパに残されている事に感動を覚えたものでした。

冒頭に述べました円安環境に関しては、これまで感じた事のない不安感に襲われました。1965年に社会人としての第一歩を踏み出した私は、外国為替市場で円高の局面の長い経験から、円の力は日本の国力を現わしていると感じています。円安によるインバウンド効果ということの評価もあるようですが、適正な水準に落ち着いて、海外との交流も滞りなく順調に行える環境が大事であることを強く思っています。そのためには、国の総合力の強化を急ぐ必要があると思います。この秋には国政にも変化があると思います。日本の政治に大きな変革を期待したいと思います。

Ein deutsches Sommermärchen



Wie die Deutschlandfahne wieder „in“ wurde

Die diesjährige Fußball-Europameisterschaft in Deutschland hat mich an ein anderes Fußballereignis erinnert.

Im Sommer 2006 verbrachte ich meinen Urlaub in Deutschland. Schon auf der Fahrt vom Flughafen staunte ich über die vielen Fahnen und Fähnchen in den Farben Schwarz-Rot-Gold. Überall wehten sie: an den Autos, in den Gärten, an den Häusern, auf den Balkonen, am Straßenrand. So etwas hatte ich noch nie gesehen.

Es war Fußball-Weltmeisterschaft in Deutschland, unter dem Motto „Die Welt zu Gast bei Freunden“. Die deutsche Nationalmannschaft belegte zwar nur den 3. Platz, aber die Begeisterung war riesig. Es war ein wunderschöner Sommer, und die Menschen strömten in die Biergärten oder auf öffentliche Plätze zum Public Viewing.

Es war, als hätte das Fußballereignis die Stimmung aller gehoben. Die Fahnen waren nur ein Zeichen für das neue Selbstverständnis der Deutschen. Man interessierte sich auch für die Herkunftsländer der anderen Nationalmannschaften. Diese Stimmung wirkte sich positiv auf das Deutschlandbild im Ausland aus.

Ende 2006 wurde dann noch der Dokumentarfilm „Deutschland. Ein Sommermärchen“ gedreht. Der Regisseur und sein Team begleiteten die deutsche Nationalmannschaft beim Training zur und während der Fußball-Weltmeisterschaft. Dabei wurde auch die Stimmung und die Fußball-Begeisterung der Bevölkerung dokumentiert.

Bis dahin gab es verschiedene Anlässe, offizielle politische Veranstaltungen, auch Sportevents, etc. bei denen die deutsche Bundesflagge gehisst wurde oder deutsche Fähnchen geschwenkt wurden. Aber bei weitem nicht in dem Ausmaß wie 2006. Patriotismus, nationale Gefühle und Symbole zu zeigen, war nach den Schrecken der Nazizeit nicht angesagt.

Die schwarz-rot-goldene Fahne hatte eine wechselvolle Geschichte, aber nie einen Bezug zur NS-Zeit. Ihr Ursprung ist unklar. Anfang des 19.

Jahrhunderts waren die Farben das Symbol einer geeinten Republik. Ich möchte hier nur einige Stationen nennen. Belegt ist, dass die Teilnehmer des Hambacher Festes (1832), die für nationale und demokratische Ziele eintraten, erstmals eine Fahne mit den Farben Schwarz-Rot-Gold mit sich führten.

Im Laufe der Zeit verbreiteten sich diese Farben, und 1848 legte der Bundestag des Deutschen Bundes offiziell die Flagge mit horizontalen Farben Schwarz-Rot-Gold fest.

In der Folgezeit kam es zu einem Farbwechsel. Nachdem der preußische Ministerpräsident Otto von Bismarck 1867 die Farben Schwarz-Weiß-Rot für sein Gebiet festgelegt hatte, erklärte Kaiser Wilhelm II 1892 die Farben Schwarz-Weiß-Rot zur Nationalflagge.

Nach dem Ersten Weltkrieg wurden diese Farben, die für die militaristische und autoritäre Monarchie standen, wieder durch die Farben Schwarz-Rot-Gold ersetzt, und 1919 als Nationalflagge in die Verfassung der Weimarer Republik aufgenommen.

1933 wurde die Fahne dann erneut ersetzt, durch die Hakenkreuzfahne der Nationalsozialisten.

Mit Inkrafttreten des Grundgesetzes am 23. Mai 1949 wurde in Artikel 22 festgelegt: „Die Bundesflagge ist schwarz-rot-gold“. Seither stehen die Farben für Demokratie und Weltoffenheit.

Seit 2006, dem Wendepunkt in der Einstellung zur deutschen Flagge, zur deutschen Identität und zum Patriotismus, sind einige Jahre vergangen. Und leider werden diese Werte in den letzten Jahren von Rechtspopulisten, rechten und rechtsextremen Gruppierungen und Parteien auf der Straße und in den sozialen Medien für fremdenfeindliche und systemfeindliche Propaganda missbraucht.

Bundespräsident Frank-Walter Steinmeier mahnte in seiner Rede am 9. November 2020 „Schwarz-Rot-Gold, das sind die Farben unserer demokratischen Geschichte, die Farben von Einigkeit und Recht und Freiheit. Wir dürfen nicht zulassen, dass sie von denen vereinnahmt und missbraucht werden, die neuen nationalistischen Hass entfachen wollen. Wer die parlamentarische Demokratie und die Menschenrechte verachtet, hat kein Recht, sich auf diese Farben zu berufen!“

Hanna Dausch-Miura

6月例会

講演会「第2次大戦下の滞日ドイツ人 (湘南方面を中心に)」

講師 大堀 聰 氏 現代史研究家

寄稿者 会員 島 新

講師の大堀聰さんは、上智大学ドイツ語科を卒業後オランダ、ドイツに駐在された。戦時中、欧州に暮らした日本人および日本に暮らした外国人について調べ研究された現代史研究家である。多数の著書があり、戦前、戦中の日独、日欧に関しての造詣が深いことが察せられる。



今回のテーマについても、第二次大戦下これほど多くのドイツ人が戦前、戦中、さらには戦後にも、日本に滞在し根を下ろしていたことに驚き、話に引き込まれ、興味は尽きなかった。ここに、話の全てを紹介することは出来ないが、特に関心を引き、記憶の残ったことを紹介し、感想、報告としたい。

第一次大戦勃発時、ドイツ人捕虜4,697名が日本の各地に収容された。第一次大戦終結後、そのほとんどは本国に帰ったが、約140名が日本に残り、活躍した。第二次大戦中の1944年には、中国人を除き約7500名の外国人がいて、その内ドイツ人は約2800名であった。これは、英、米、ソ連、仏、伊などと比べて圧倒的に多かった。この人数は終戦まで変わらない。

これら日本にいたドイツ人は、とりわけ湘南地方に多くの足跡を残している。だが、これらのドイツ資産は、GHQの徹底した調査により補足され、多くが没収されている。逗子・葉山のエルヴィン・ベルツの別荘、ベルンハルト・モーアの別荘。鎌倉では、材木座のモリソンコンパウンド、鎌倉山の独日荘、材木座のイリス商会、鎌倉海浜ホテル、いまでも営業して良く知られた長谷海岸近くのドイツレストラン・シーキャッスルがある。栄光学園がドイツ人の要請で設立され、初代校長はドイツ人であったとのこと。

藤沢では、片瀬に東京品川のドイツ機械輸入商社レオポルド商会の社長クルト・マイスナーの住まいがあった。菅原通済はマイスナーの着想から「鎌倉山」での高級分譲地開発をしたとのこと。

藤沢では、片瀬に東京品川のドイツ機械輸入商社レオポルド商会の社長クルト・マイスナーの住まいがあった。菅原通済はマイスナーの着想から「鎌倉山」での高級分譲地開発をしたとのこと。

茅ヶ崎には、明治期から大正期にかけて、20人を超える外国人が住み、「ドイツ村」と呼称された場所があった。中海岸から東海岸、菱沼・小和田地区へと発展。貿易商社ラチエン商会を営んだルドルフ・ラチエンの別荘があり、今も、ラチエン通りの愛称が残っている。大磯にもドイツ人が住み、火の見櫓の警鐘が寄贈されている。

箱根は、枢軸国人の疎開地となり、終戦時には770人ほどのドイツ人がいた。箱根芦之湯の松坂屋旅館には75名のドイツ海軍兵が1943年4月より滞在していた。これは、1942年11月、横浜港に停泊していたドイツ海軍の船が爆発し、61名が死亡、ドイツに帰れなくなった残留水兵が終戦まで滞在していた。筆者はこの話を以前に読んだ事がある。戦時中、食料調達など大勢の水兵を養うため長期間大変な苦勞をしていた。

これまで日本滞日ドイツ人というと、第一次大戦の青島捕虜が収容された四国の板東俘虜収容所や第一次大戦終結後も日本に残留してバウムクーヘンを製造販売するユーハイムを創業したドイツ人の事など断片的には知っていたが、もっと多くのドイツ人が、日本に、特に湘南地方に、しかも第二次大戦中にも滞在していたのだ。

今回紹介されたゆかりの場所を、ぜひ訪ねてみたいと思っている。



講演会後の懇親会 前列向かって右端が寄稿者島さん

7月例会

講演会「105歳（106歳を間近に迎えて）」 を振り返る

講師 会員 藤田 操氏



寄稿者 柚岡 一明氏

公益財団法人日独協会 常務理事

7月28日(日)、湘南日独協会主催の講演会に参加いたしました。日中の猛暑にもかかわらず、会場には50名を超える多くの会員の方が出席し、その関心の大きさがうかがえました。



講師の藤田操氏は1918年(大正7年)

9月生まれの105歳とご高齢にもかかわらず、幼少期から戦前・戦後を経て、68歳から本格的に始めたドイツ語学習の研鑽まで、長い個人の歴史について説明し、1時間半を超えても語り尽くせず、懇親会まで興味深い話を提供いただきました。

藤田氏の東京・大塚での幼年の思い出としての、凧揚げ、金ヤンマ、メンコ遊びなどの話には皆さんうなずいていました。こうした日本的な町の情緒は、戦後の田舎で育った筆者の記憶とも重なりました。

旧制高等学校から東京帝国大学法学部乙類(ドイツ法)に入学し、サッカーに熱心で、ドイツ語にはそれほど関心がなかったとのことですが、今でも当時のドイツ語教材を大事にお持ちです。

藤田氏の軍での経験は興味深い話でしたが、紙面の関係上、軍歴にとどめます。1942年(昭和17年)10月1日、近衛歩兵第4連隊補充隊に応召。1944年(昭和19年)1月17日、南方派遣。同年4月10日、小スンダ列島フロレス島(インドネシア)の防衛。1946年(昭和21年)5月28日、名古屋港帰着、召集解除。

1923年から1954年の間に旧制高校のサッカー選手であった人たちが1975年に創設したサッカーチーム(SOI)に藤田氏も参加し、1980年以降、毎年一回海外遠征を行っていたそうです。ドイツ遠征の際、久しぶりにドイツ語を耳にすることがきっかけで、ドイツ語習得の意欲に火がつけました。

1986年(68歳)のプルンのゲーテ・インスティテュート(キームゼー)で、孫の年代の人たちと一緒に3か月コース受講を皮切りに、シュヴェービッシュ・ハル、ハンブルク、ワイマール、麗澤大学などでドイツ語を学び、今は湘南日独協会の読書会でドイツ語に取り組んでいらっしゃいます。

教育勅語を今もそらんじ、記憶力も素晴らしい藤田翁のお話をお聞きし、長寿で健康で、さらに幸福に生きることについて深く考えさせられた一日でした。

なお、藤田氏のご尊父、藤田徹(とおる)氏は、横浜-ホノルル-サンフランシスコを12日間あまりで結び、その優雅な容姿から「太平洋の女王」と呼ばれた日本郵船の豪華客船「浅間丸」や「箱根丸」などの船



その後一同元氣なりや。
浅間丸、箱根丸……数多く船長を務め、
世界を航海した父は、日記を記し、
家族を想い30年にわたり手紙を送り続けた。
大成丸の世界一周

ご尊父の日記をもとに
出版された著書

長を務め、世界中を航海しました。彼は日記を記し、またご家族を想い30年にわたり手紙を送り続けました。この手紙と大成丸の世界一周航海日記を収載した藤田操著『船長藤田徹』が刊行されています。是非ご一読ください。



著書の内容の一部

このような貴重な機会をいただきました湘南日独協会の皆様に心より感謝申し上げます。



終了後ロビーで

湘南日独協会創立25周年記念「日本文化を楽しむ会」へ参加して

5月19日開催のお茶とお香の会参加者から寄せられたメッセージ

鶯を聞きながら日本文化に親しむ



榊 眞 様

鶯の囀る茶室で、香と茶を楽しむとは思ってもよらなかった。湘南日独協会創立25周年記念「日本文化に親しむ会」に参加できた幸甚だ。

日独協会の講演会に一度参加させていただいたことはあったものの、香道教室で知り合った大澤郁香先生（大沢由美子氏）の伝手でこの会に参加させていただいた。会場の宇庵も初めて。どのような方が列座されるかも知らないのに、正客となるよう伝えられ、受付後の30分は緊張気味に過ごした。

香席は、「湘南日独協会創立式拾五周年記念」と書かれた表紙のある源氏香之図を見ながらの小島邦香先生（泉山御流）のご説明が座を和ませてくれ、今回のテーマ『源氏物語』の世界へ入っていく。一炷目の香りがよくて、5つの香を楽しむことができた。

茶は裏千家。香席は幾度か経験したものの、お点前を拝見できる茶席に出たのは初めて。茶碗、茶道具も小川宗和先生がやさしく解説してくださり、薄茶を堪能できた。この会、席のはじめに木原新会長さんのご挨拶がなかったら、日独協会の催しとは思えなかったかもしれない。

ドイツは数度訪れたことがある。3度訪れたニュルンベルクは第2次大戦後旧市街の建造物を、旧に復したと聞いた。そこに根付いた文化の深さに旅行者は魅了される。日本人にもあまり知られていない香道という伝統文化を、日独協会の主催で紹介されることに意義があったと思いつつ、最寄りバス停「(田谷の) 洞窟前」から帰途に就いた。



贅沢な一時でした

玉井 仁子 様



去る5月19日横浜市栄区宇庵にて、湘南日独協会創立25周年記念行事「日本文化に親しむ会 茶道と香道をとおして」が開催され、30余名の客の一人で参加しました。

当日は前の日まで続いた季節はずれの暑さが和らぎ、時折小さな雨粒が落ちては止むというお湿りになり、適度な大気の湿気がより香りを立たせるお香日和でした。

立礼席での正客を承っていましたので、早めの到着になりましたが、庭を拝見したり参集の皆様と歓談したりするうち、あっという間にお席の時間です。

初めての大会に少々緊張気味でしたが、掛け軸やお茶碗の由来を伺いながら、源氏物語の主要人物『紫の上』に因んだ紫餡の特製饅頭を頂戴した頃には、聞こえるのはただ茶筌の立てる音だけの静寂に安らぎ、運ばれてきた薄茶をおいしく頂くことができたのです。

お茶の後はお香、源氏香が始まります。先生のユーモアあふれるお話で、皆様方真剣に解答に取り組まれつつも、長閑やかに時の流れに身を委ねられ楽しまれているようでした。



時短、簡略化、AI化が声高に叫ばれている昨今、珍しい和菓子や薄茶を戴き、丹精込められた設えを目に由緒あるお道具

に触れ、雑音のない静けさの中で、銘香木の香りを聞く何とも贅沢な一時でした。古人の雅な伝統に接することで、改めて日本人としての五感が研ぎ澄まされ、満ち足りた心で帰路についたのです。

「日本文化に親しむ会 茶道と香道をと おして」に参加して



ご一緒に参加されたお母様と、会場宇庵の入り口で

会員 鈴木 洋子

湘南日独協会の会報誌
Der Wind 3月号を拝見し
「日本文化に親しむ会
茶道と香道をとおして」
という企画のご案内の、
日本庭園の写真に目を惹
かれました。

私は祖母がドイツ人で、母も私も華道は習ったことがあるのですが、茶道、香道はほぼ初めてでしたので、緊張する気持ちがありました。早速、母（会員）と私の二人分の申し込みの連絡をしました。すでにほぼ満席という盛況の中、無事申し込みが受付られ参加することができました。

茶道、香道と初めてのことで、参加するに先立っていろいろ調べて予習をしようと思いましたが、とはいえ、何もわかりませんので、まずは服装とせめて茶道の基本の作法がわかればと思い調べました。香道は、源氏香ということでしたが、お香の香を聞いて当てるそうです。

会場は、九つ井の宇庵で、ご案内によりますと、お庭は作庭家 安諸定男氏が作庭したものとあります。

当日は、石畳の階段につづく道を歩いていくと門があり、一歩くぐると別世界でした。

私たちのグループは、組香を先に、その次にお茶会でした。

香道のご指導は、泉山御流師範 小島邦香先生です。源氏物語を題材にした源氏香の組香でした。5種類の香木がそれぞれ5包ずつ用意されており、25包あるうちの5つの香が無作為に選ばれるとのことでした。源氏香之図を配布くださり、香木のお香を聞き、5本の縦線を引いて、同じお香を聞いたと思ったら横線をつなげます。そこで図形ができあがり、源氏香之図を見ながらどの図形になったかをさがして回答し、答え合わせをします。源氏香は52種類ありますが、源氏物語54帖のうち、最初と最後以外の52帖からとったものだそうです。お香を聞きながら、源氏香の図形と文字を見ていると心が躍りました。

茶道のご指導は、裏千家師範 小川宗和先生。お茶会ではまずお饅頭をいただいて、その後、お茶を点ててくださりふるまわれました。茶器は、各人にそれぞれ違ったものを出してくださり、中には金沢の大樋焼もありました。掛け軸は「山水有清音」。お花を愛でながら、お庭と一体になった空間で過ごしたひととき、鳥のさえずりのかわいいこと。

ご一緒させていただいた皆様と過ごさせていただいた時間はまたとないひと時でした。控室には素敵なランプがあり、これもまたしばらく余韻に浸ることのできる時間をいただきました。そして、当日は予習していたはずの所作を実行にうつすことの難しさ！ そのように体を自然に動かされている先生方の所作に感動を覚えました。

素敵な企画をくださり心より感謝申し上げます。



久々に味わいました

会員 鈴木 章子



湘南日独協会の会報に、お茶とお香の会の案内があり、心がさわいだ。私も高齢の身になって正座に耐えられなくなり、久しく茶会などというものを敬遠していたのだが、何故かこの時は衝動に駆られて出席の申し込みをしてしまったのだった。その日から、毎日すこしづつ正座に慣れる訓練を続けて来た。

5月はずっと爽やかな晴天の日が続いていたが、茶会当日は梅雨の前兆のような湿っぽい陽気だった。しかし、茶亭の庭のみどりには、そのしっとり感が心地よく、より美しかった。

茶道の魅力は、畳上の所作の美しさにある、と私は思っている。茶会の申し込みの時、座礼と立礼を選べるのだが、私は自分の年齢をも考えず、無謀にも座礼を選んでしまった。

今回の茶会のテーマは「源氏物語」ということで、茶道具や菓子も、源氏物語に由来したものが出された。私は久々に味わうお釜の湯の柔らかさが嬉しかった。かなり長い時間、正座をしていたが、足の痛みもなく、茶の世界を楽しむことが出来た。

しかし、後半のお香の席についてまもなく、足の痺れがひどくなり、お香を楽しむどころの余裕もなく、身動きできないほどの痛みに襲われてしまった。退席することも出来ないまま、ひたすら痛みに耐えて過ごした、1時間でした。

今の時代は沢山の楽しいことに溢れていますが、それを楽しむことにも、年齢制限があるのです。おのれの歳を考えさせられた1日でもありました。



ブレーマーハーフェン 志賀トニオ氏

ドイツの8月は年度の始まり。ブレーマーハーフェン歌劇場も6週間のお休みを経ていよいよ新シーズンがスタートします。今シーズン最初の演目はプッチーニ作曲“トゥーランドット”です。この作品は私が劇場のキャリアを開始した時に最初に取り組みました。そこで今回は番外編として私がドイツでのキャリアをスタートするまでの道程をお送りしたいと思います。

当時私はロストック（Rostock）音大の指揮科に在籍していました。大学3年生に入学し、2年間のカリキュラムが終了間近でした。ドイツの音大生は4年生の時に卒業を待たずにオーディションを受け始める事が多く、私も卒業試験の準備と並行してオーディションの準備に取り掛かりました。ドイツの指揮科の学生は基本的に指揮者としていきなり就職する事は稀で、殆どの場合まずはコレペティトアとして劇場に就職します。したがって必然的にコレペティトアとしての力量が将来を左右するため、ドイツの指揮科は入試もピアノ科並みのレベルが要求され、大学のカリキュラムも劇場での仕事やオーディションを念頭にピアノを弾く時間が大部分を占めています。私もロストック音大に入学する前に毎日ピアノを猛練習したものです。そしていざオーディションを受けたい！といってもそう簡単に受けさせてもらえないのがドイツの難しい所です。ドイツの劇場では履歴書を出した後に審査を通過し招待状を貰う必要があります。その招待状を貰うのが大変難しいのです。その条件は学歴はもちろんの事、年齢や国籍も審査対象となり、30歳を越えると就職が難しくなってくると言われています。音大に入学する時にも年齢制限がある学校が多く、入学時で29歳であった私は受け入れてくれる学校を探すのに苦労しました。そのような経緯があったため、大学4年生であった私は大学院に行く事はせずに、少しでも早くオーディションを受け始める事にしました。しかし、2年弱しかドイツの音大に在学していなかった私は、4年ないし、大学院も含めて6年在学していたであろう他の学生に比べて学歴も劣り、人間関係も構築できていないと感じていました。

ドイツでもコネ（コネクション）というのは重要で、その力が他の学生より劣ると感じた私は、直接劇場に履歴書を送っても審査を通るのが難しいと考え、まずは音楽事務所にオーディションに行く事にしました。

ドイツには公立の音楽事務所があり、その音楽事務所に所属する事で劇場からの招待状を貰う確率を上げようと考えたのです。さっそくロストックから最寄りのベルリンの事務所に電話をかけ、アポをとってオーディションを受けに行ってきました。そして首尾よく合格！そしてその1週間後にはさっそくその事務所を通して劇場のオーディションの話が舞い込んできました。場所はノイシュトレリッツ（Neustrelitz）。ロストックとベルリンの間の町で、ロストックからは電車で1時間程。駅から劇場までは徒歩15分程。小さいけど素敵なおとぎ話に出てくるような劇場でした。人生初の劇場でのオーディションはあえなく撃沈。自分としてはやり切った感があったので満足していましたが、やはりそんなに簡単ではありませんでした。オーディションの後は劇場の近くの湖で気晴らし。

とっても素敵な所でした。するとその1週間後にはさらに次のオーディションの話が舞い込んできました。しかも今度は2つの劇場。一つはハレ（Halle）という町の劇場。もう一つはワイマール（Weimar）。ハレはノイシュトレリッツの時と同じコレペティトアの仕事でしたが、ワイマールは合唱アシスタントの仕事で、しかも専属契約ではなく、とりあえず3か月の契約との事。専属契約の場合はまず2年契約で、その後1年ごとに契約が延長されていくのですが、短期契約は色々な事情（病気や妊娠等）があり、受験する時には専属契約よりも競争率が下がる為、音大生が最初に就職する時にはそこを狙って契約を勝ち取り次に繋げていく事ができます。

しかしワイマールの劇場は歴史がある所謂名門です。しかもハレとワイマールとオーディションの日程が二日続きでした。どちらかにしぼるべきか、両方受けるべきか大変悩みました。なぜなら、コレペティトアと合唱アシスタントはオーディションの内容が全く違うのです。その両方を準備する事で、二兎を追う者は一兎をも得ずにならないのか。しかし招待状を貰う事自体難しいのだから、キャンセルするのはもったいないと感じた私は両方受ける事に。

幸いハレのオーディションの内容はノイシュトレリッツの時とあまり変わらなかったのも、薄々チャンスを感じていたワイマールのオーディションの準備に力を入れました。

さすが伝統ある劇場のオーディションで、トスカ、ラ・ボエーム、トゥーランドット、カルメン、神々の黄昏等、とても難易度の高い合唱箇所が課題でした。ロストックからハレまでは電車で5時間程。ヘンデル生誕の町であり、大変立派な大きな劇場でした。オーディションでは結果がすぐに知らされず、一喜一憂する間もなくそのままワイマールへ移動。夜7時くらいだったと思いますが劇場に行ってみました。オーディションは次の日の朝でしたが、ひょっとして少しピアノを練習させてもらえるかと思えば楽屋口の守衛さんの所に行くと、なんと合唱監督を呼んでくれました。そして次の日のオーディション会場のピアノで練習して良いと言ってくれたのです！何か縁を感じた私は晴れて次の日のオーディションに合格し、その場で契約書にサインし、その数日後にはさっそく仕事が始まるのでした。結局当初の3か月契約が2度更新され1年間働く事が出来、大変レベルの高い環境の中素晴らしい経験を積む事ができました。

思い出のワイマール時代の写真



ゲーテとシラー像と劇場



稽古場を訪ねて来たリンデさんと



住まいを遠景に
21/11/2008

会員の皆さんからのお知らせや自己紹介などの投稿

「楽しいドイツ語教室」のお知らせ

会員 船木 健

大船の鎌倉市学習センターで、ミュンヘン出身の志賀ギゼリンデさん（湘南日独協会会員）の教室が毎月2回月曜日に開催されています。時間は（9:30~11:00）の1回90分です。ギゼリンデさんは日本語も話しますが、授業中は専らドイツ語です。

授業の内容は45分は教科書を使用、45分は主に各自の近況をドイツ語で発表することです。中級の方から上級の方まで現在7名です。とても家族的な雰囲気のクラスです。

見学を歓迎します。なお志賀ギゼリンデさんは、湘南日独協会会報Der Windに「劇場便り」を寄稿している志賀トニオさんのお母様です。

照会先： 船木 健

電話： 045-891-7137

メール： funaken@sage.ocn.ne.jp

Deutsch-Unterricht - auf Deutsch - für Mittelstufe und Fortgeschrittene - gehalten von Giseline Shiga (Mitglied der Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan und Mutter von Tonio Shiga, der regelmäßig in der Zeitschrift 'Der Wind' über Bremerhaven schreibt) zweimal im Monat im Gakkushu Center in Ofuna, montags 9:30 bis 11 Uhr. Inhalt: freie Konversation und die Besprechung von Aufsätzen - alles auf Deutsch. Und die Benützung des Buchs "ドイツ人の当たり前". Für Fragen können Sie sich an Herrn Funaki wenden.

皆様のご寄稿・投書を募集しています。
グループ活動の情報なども歓迎いたします。
スペース・内容に関しては事務局へご相談下さい。

会員自己紹介



室賀 みどり 2024年5月入会

私の夫がドイツ勤務することになり、Frankfurt近郊に滞在したのは1981~91年、1996~2004年の通算18年となり、いまではEUは私の第二の故郷と感じています。

夫が会社からドイツ駐在の打診を受けたのは忘れもしない4月1日でした。「嘘でしょう?」と言ったのは、40年も前のことです。

住んだのは、どちらもFrankfurtの北西20キロ、Taunus山の麓の美しい町でした。まずはドイツ語を学ぼうと20代の私は語学学校へ日参、それから流れてフランクフルト州立大学の学生になりました。

この語学学校、キャンパス・ライフその後の日本語講師などを通じて、驚いたのは、ドイツ人男性の自由で柔軟な発想です。そのひとつは、授業中常にレグウォーマーを編む男の子はとても新鮮でした。個性を伸ばす教育の恩恵をその後何度も感じました。

現地で出産し、息子のKrabbelstube（はいはいきょうしつ）や学校生活を通して、ドイツ流子育てや民間行事に触れました。母親の会で仲良くなった友人達とはWhats`upで今なお繋がれるのも、現代ならではの有難い事です。

2回目の滞在時は、息子がインターナショナルスクール中高(とフランクフルト補習校)に通い、親も社交の場が更に国際色豊かでした。また子育てが一段落した後は、Med. Fusspflegeのスクールに通いました。夫の帰国が決まっても、私は免許取得後の実践を積みたくて、逆単身赴任?一人で1年ドイツに残り勤務し、帰国後は現在も京都の整形外科医院で治療に従事しています。(現在は後任に移行中)

趣味はスポーツ、音楽と旅行です。特にオペラとバレエ鑑賞です。Urlaubで訪れるヨーロッパ各国での舞台鑑賞は至福の思い出です。

老後は海辺で暮らしたいと見つけたのが鎌倉の家です。現在は京都と鎌倉の2重生活です。そして湘南日独協会ではどんな新しい出会いがあるのかとても楽しみです。Bierfestでは皆様と乾杯致しましょう。

Ein Prosit !

湘南日独協会会則改定

会長 木原 健次郎

本年4月総会で出されたご意見（総会のあり方）を踏まえ、役員会で議論を重ねた結果、以下の諸点につき、進め方を修正し、其々につき下記の通り、会則に反映する事としましたので、御報告申し上げます。

（改訂後の条文）

- 第12条 - 1 ・総会は正会員によって構成される。総会は本会の最高議決機関であり、正会員は各1票の議決権を有する。総会は年一回開催するものとし、会長がこれを招集する。
- 2（総会招集手続き）：
・会計監査終了後、会長は正会員宛て、総会議案書・議決権行使書用紙・委任状を送付する。
- 3（議決権行使）：
・正会員は、総会出席又は議案書各号に関する書面での賛否表明によって議決権を行使できる。議案書への書面での賛否表明の場合は、期限までに郵送又は電磁的手法で議決権を行使する。
- 4（決議）：
・総会での議決は、以下の計算式を満たす票決をもって承認とする。
賛成議決権行使数+委任状数 > 1/2 議決権行使数合計

以上

会員各位のご意見が、より公正かつ確実に協会運営に反映されるよう心掛けてゆきますので、今後ともご支援・ご協力をお願い致します。

「2024望年会のお知らせ」

„JAHRESABSCHLUSSPARTY2024“

2024年を締めくくる湘南日独協会望年会を下記のとおり開催します。皆で1年を振り返って、新しい年を望む楽しいひとときを過ごしましょう。

- ・日 時：2024年12月14日（土）17：00～19：00
- ・会 場：中国料理 煌蘭 藤沢店（さいかや藤沢8F）
- ・参加費：6,000円／名（税、飲み物代込み）
- ・申込み：11月30日（土）まで
- ・担 当：星野 Tel. 0467-39-3843
- ・E-mail：sean.hoshino@gmail.com

☆参加者氏名をご連絡ください（会費は当日徴収）

湘南日独協会 Bierfestのお知らせ

本年は、従来型のオクトーバーフェスト（藤沢市民会館）に代えて、藤沢のレストラン貸切りで、以下のようにBierfestを開催致します。フレンチのコース料理とドイツのビアソングをschunkelnしながら楽しみましょう！ 定員に達し次第締め切りますので、お誘い合わせの上、お早めにお申し込み下さい。（詳細は添付チラシ参照。バンドの生演奏なしの、カラオケ方式です）

- ・日 時：2024年10月19日（土）14：00～17：00
- ・会 場：ビストロ・ラシャンブル（藤沢駅南口から徒歩10分 Tel. 0466-27-8961）
- ・会 費：6,000円／名（税、飲み物代込み）
- ・申込み：振込締切 10月4日（金）
（ゆうちょ銀行 口座番号 00210-9-22718）

新カリキュラムで開講 実践重視に一新

” Deutschkurse Herbst/Winter 2024 “

2024年度秋冬期ドイツ語講座

10月に開講するドイツ語講座2024年秋冬期は、初級後半レベルおよび中級レベルの新しいカリキュラムがスタートします。中級クラスでこれまで取り組んできたドイツ発行の教科書Schritteを卒業し、今学期からはドイツのラジオ局“Deutsche Welle“が作る教材を使った講座を新たに二つ開始します。

一つは動画“Nicos Weg“を使った初級後半レベルの発話トレーニングコース。初めてドイツにやってきたNicoをめぐるショートドラマの会話理解と登場人物のアフレコ練習などを通じて、ドイツ語の発話力のトレーニングを行います。

もう一つは音声と文字テキストからなるPodcastを使った、中級レベルの音読と聴解のトレーニングコース。ドイツ人の話が聴けて、ドイツ語の映画やドラマが字幕なしで見られることを目指します。初級クラスではSchritte3を使ってドイツ語の基礎を学びます（継続クラス）。いずれも日本人講師によるリアル授業で、隔週土曜日に各10回行われます。

詳しくは会報同封の受講案内および申込書をご覧ください。

星野 諭（湘南日独協会理事）

〒248-0032 鎌倉市津1069-187

Tel/Fax： 0467-39-3843

E-mail： sean.hoshino@gmail.com



フリース先生、中川先生を囲んでの食事会

寄付金御礼申し上げます

2024年上期中、下記の方々に寄付金を頂きました。お名前はいずれもお願です。

大久保 明様	大堀 聡様	勝俣 正安様
木原健次郎様	島 新 様	清水 孝佑様
杉本 暁史様	高橋 善彦様	中村由紀子様
能登 崇 様	藤田 操様	松川 倫子様

編集後記

Der Wind 9月号145号では、2つの新しいページをお届けしました。

P2には、今年度より新たに就任された、理事のダウシュ・三浦ハンナさんのご寄稿で全文ドイツ語です。従来日独協会の会報にしては、ドイツ語の情報の掲載が少ないとの印象を多くの会員がお持ちだったと思います。これからは皆さんがご存知の方のドイツ語の文章ですので、古い文学書には無い、新鮮なドイツ語を読む楽しみになってほしいと願っています。皆さんのご感想を是非お聞かせください。

P4には、会報の発行日が106歳の誕生日となります。藤田操さんの講演会、7月例会の報告が掲載されています。藤田さんは非常にお元気で、月2回の読書会へはこれまで皆勤です。2時間の今回の講演ではメモを読み上げることなく、データーもしっかりと記憶されて、休憩もほとんど無しにお話されました。全く驚きです。

P7の北ドイツのブレーマーハーフェン歌劇場で活躍中の、志賀トニオさんの「劇場だより」は38回を数えました。この夏もご家族で暑い日本で休暇を過ごされました。この「劇場だより」を読んで、ブレーマーハーフェン歌劇場のオーディションを受け、採用され活躍されている方がおられるそうです。Der Windを発行している我々にとって大きな喜びです。

「ドイツ語講座」も一新されました。皆さんがご自分のレベルに合わせて、挑戦し楽しんで頂きたいと思っております。
(大久保)